

ラ
ッ
パ
ー
の
り
お

吉
田

浩
二

登場人物

立野則夫（25）居酒屋でアルバイトしながら

がらッパーを目指している。

安藤隆史（25）立野の相棒

桜井花子（19）カラオケ屋店員

武田義春（28）居酒屋社員

葛野敏夫（45）デリヘル店員

立野太郎（50）立野の父。アルコール

中毒者

川中龍（28）ラップグループ、ノライ

ヌのリーダー

渋谷茂（22）ノライヌのメンバー

鈴木（25）立野と安藤の高校の同級生

二宮一平（33）音楽プロデューサー

○地下闘技場・スネイク入口（夜中）

深夜の裏通り。

ガラの悪い男たちがたむろっている。

○同・ホール前の廊下

廊下の隅で立野則夫（25）と安藤隆史

（25）が緊張した様子で小声でラッ

プの練習をしている。

立野が腕時計を見る。

立野「そろそろ行こうか」

安藤「やったるぜ！」

2人はホールのドアを開けて入って行く。

○同・ホール内

薄暗い中、大勢の若者達が立ってステー

ジを見ている。奥のステージでリズムに

合わせラップする若者。

ステージ端に立野と安藤が立っている。

MC「準備はいいかな？」

立野がうなづく。

安藤「手が震えてるじゃん」

立野「えっ、そ：：：：そうか」

MC「次はラップバトル初参加、地元出身の川本小僧。音楽スタート」

音楽がスタートする。

立野と安藤はリズムに合わせてラップを始めるがよく聞こえない。

しらけて立ち尽くす聴衆。

観客1「おいおい、聞こえねえぞ」

観客2「チキンはひっこめ」

観客3「びびってんのか」

観客たち「帰れ、帰れ、帰れ、帰れ・・・」

観客のブーイングが始まる。

ペコペコと頭を下げてステージ脇に引込む立野と安藤。

○居酒屋「川本次郎」外観（明け方）

24時間営業と書いてある看板が光っている。

○同・店内

狭い店内。カウンターとテーブル席が2つ。

カウンター内で立野が焼き鳥を焼いている。カウンターには作業着姿の中年客が2人と、二宮一平（33）が座り酒を飲んでいる。

武田義春（28）が入って来る。二宮に気付いて武田がお辞儀する。

武田「二宮さん、おはようございます」

二宮「おはよう」

武田「毎朝、ありがとうございます」

二宮「家がすぐそこなんでね。仕事帰りに一杯」

武田「ごゆっくりどうぞ」

武田はカウンター内に入って来る。

武田「おはようさん」

立野「おはようございます」

武田「ラップバトルどうだった？」

立野「聞かないでくださいよ」

武田「うまくいかなかった？最初はそんなも
んさ」

立野「というか、途中退場で・・・」

武田「途中退場？さんざんだな。まっ、気に
すんな。次がある」

立野「気にしますよ」

武田「場慣れというのがあるからさ。まずは
空気に慣れることだ。またエントリーす
る？」

立野「まだそんな実力じゃあ・・・」

武田「何度もその場に立って、まずは慣れる
ことだって」

立野「俺らの実力で参加していいものなの
かなって思うんですけど」

武田「そんなこと言っていると、いつのまにか
何年も経って気づいたらおっさんだよ」

立野「……」

武田「月1回は出た方がいい。自信もちな」

立野「わかりました。じゃあお願いします。

俺、あがりなのでこれで」

武田「疲れたろ。ゆっくり休んで」

○一戸建て外観（朝）

○同・玄関

立野が入って来る。

立野「ただいま。鍵かかってないよ」

○同・居間

立野太郎（50）がテーブルに突っ伏して寝ている。よだれをたらしている。

チューハイの空き缶が何本もテーブルに置いてある。椅子には杖がたてかけてある。

立野は床に転がっているダウンを拾い、太郎にかけてやる。

立野「飲みすぎなんだよ」

太郎はげっぷで答える。

立野「くっさ」

○仏壇前

立野が手を合わせている。中年女性の写真が飾られている。

立野「母さん。今日はラップバトルデビューだったよ。結果はさんざんだったけどまた挑戦する。見守っていて」
写真のアップ。微笑んでいる中年女性の顔。

○同・立野の部屋

壁にはラップスターのポスターが何枚も貼ってある。その中に「竜神 DJ わたべ」と書かれた男の横顔のポスターもある。机の上には新聞の切り抜き。ノートが何冊も積んである。

立野は服を着たままベットに倒れこむ。

○雑居ビル外観（夜）

○デリヘル「フラワーズ」事務所内

安藤が椅子に座っている。

葛野敏夫（45）が隣で雑誌を読んでいる。

後ろのソファーに女の子が座って、爪の手入れをしている。

電話が鳴る。

安藤「ありがとうございます。川本の楽園、デリヘルフラワーズです」

客の声「初めてなんだけど」

安藤「どういう子がタイプで？」

客の声「ギャル」

安藤「今は自宅ですか？ホテル？」

客の声「自宅」

安藤「住所は？」

客の声「んーつとね・・・」

電話が切れる。

安藤「ゆずちゃん、初仕事。ここ行って」

安藤は女の子に住所が書かれたメモを渡す。

安藤「場所はすぐ近くだしわかるよね」

女の子はうなづく。メモを受け取りしぶしぶ出ていく。

葛野が顔を上げる。

葛野「なんか儲かる仕事ないかなあ」

安藤「：：：」

葛野「何か見つけたらさ、2人でやろうよ」

安藤「そうですね。給料日まだかな」

葛野「あと1週間もあるだろ」

安藤「長いつすねえ。どうしよ」

安藤は財布を開けてみる。1000円札が2枚。

○プロミス外観（夜）

○同・中

安藤がATMにクレジットカードを差し込み、金を引き出している。

○公園のベンチ

ヘッドフォンをつけた立野がアンパンを食べながら紙に何か書いている。アンパンをベンチに落とすが、息を吹きかけてほこりを払い口に入れてしまう。

○カラオケボックス「カラカラ」外観

○同・受付

立野と安藤が受付に。受付には桜井花子（19）が立っている。

花子「お名前と連絡先をお願いします」

安藤はうなづく。用紙に名前など書いている。

立野「この時間はいつも君？」

花子「そうです」

安藤「アルバイト？」

花子「はい。2時間でいいですか」

立野「それをお願い」

安藤「よく会うね」

花子「ほぼ毎日入ってますから」

花子は笑顔をみせる。

○カラオケボックス内

立野と安藤は曲を流し、それに合わせて
ラップを口ずさんでいる。

○同・廊下

花子が通りかかる。ボックスを覗く。
熱唱している立野と安藤が見える。

○同・受付

清算する立野と安藤。

花子「歌の練習？」

安藤「そうそう。俺らラッパーなんだ」

花子「自称ラッパーですか」

安藤「失礼だな」

立野「まあ、今はね」

花子「この辺り、ラップやってる人、多い
ですね」

立野「駅前にライブハウスがあるからね」

安藤「興味あつたら今度、俺らのボックスに

寄ってみてよ」

花子「仕事中だし」

安藤「5分もかからないからさ」

花子「じゃあ、今度」

立野「よし、じゃあ明日も来るわ」

安藤「おねえさんは学生？」

花子「そうですよ」

安藤「なんの勉強してるの」

花子「いちおう芸大です。前衛芸術」

立野「ぜんえい？何それ」

花子「モダンアートの方がわかりやすいか

な」

安藤「芸術家目指してるのは同じだね」

花子「芸術家：：まあ確かに」

他の客が入って来る。

立野「じゃあ、また明日」

2人は出ていく。

○一戸建て外観（夜）

○同・居間

太郎がテーブルで飲んでいる。テーブルの上には大きな紙袋が置いてある。

立野が入って来る。

立野「また飲んでんの」

太郎「いいだろ、べつに」

立野「今日は勝ったんだね」

太郎「おう。お前も好きなの持ってたていいぞ」

立野「じゃあ」

立野は紙袋を覗き、ポテチを持っていく。

立野「飲みすぎはよくないよ」

太郎「そんなこたあわかってる」

立野「一日中飲んでんじゃん」

太郎「親に注意するな」

立野「注意されるような生活してるからだろ。」

死なれたら困るんだよ」

太郎「死ぬほど飲んじやいない」

立野「ほんとは働いてほしいんだけど」

太郎「俺は働きたくても無理なんだよ。こんな体だろ」

立野「どこか働き口はあるんじゃない？」

太郎「ないね」

立野「よく探してもらったら？ちゃんと働いてもらいたいんだけど。世間体もあるし」

太郎「世間体？いつ世間体なんて小難しい言葉、覚えてんだ。働いたら生活保護、貰えなくなるだろ」

立野「……」

太郎「夕食はこれな」

太郎はテーブルに置かれたコンビニ弁当を指す。立野はそれを取る。

立野「野菜炒めでも作るよ。キャベツが冷蔵庫にあったでしょ」

立野は、台所に向かい、鍋で野菜をいためる。

太郎「塩とこしょうだけでいいから」

立野「わかった」

太郎「あまり炒めすぎないように」

立野「細かいな。俺はいちおう料理人だよ」

立野は鍋からテーブル上の大きな皿に
野菜炒めを盛る。

太郎「うまそうだな。また飲みたくなってきた」

○同・立野の部屋

立野はヘッドフォンをつけ、体を揺らし
ポテチを食べながらノートに歌詞を書
いている。

○カラカラ外観（朝）

○同・カラオケボックス内

花子が座り、その前に立野と安藤が立っ
ている。

立野「1、2、3、4」

安藤はプレイヤーの電源を入れる。

音楽に合わせて2人はラップする。花子

は手拍子を打つ。

立野・安藤「俺ら川本生まれ、川本育ち。

ラッパーの卵、地域を揺らす。夢は

頂点、羨望の的。地元の餓鬼ども、2人にひれ伏す。女ども、しつけえぞ。つきまとうな。みんなで叫べ、川本の生ける伝説。ラップゴット ラップゴット、ラップゴット川本小僧。ラップゴット、ラップゴット川本小僧」

立野と安藤は首を前後に揺すっている。

花子は笑いだす。

× × ×

立野「どう？」

花子「：：：」

立野「リズムが悪いとか？」

花子「なんか歌詞が。川本小僧って妖怪？。

都市伝説？」

立野「妖怪って」

花子「不気味」

安藤「そう感じさせるのが狙いなの」

花子「ふうん」

安藤「共感した？」

花子「共感とかはない」

立野「男向けの歌詞だしね」

安藤「リズムはどう？」

花子「そのままでもいいと思う」

立野「もう少し、書き直すよ」

花子「ラップバトルって明日？」

立野「うん」

花子「面白そうだから見に行こうかな。駅前

でしょ。私の展示会も見に来てくれな

い？」

安藤「展示会やってんの」

花子「うん。駅の近くで」

立野「じゃあこれから3人で行こうよ。安藤

も暇だろ」

安藤「そうだな。つきあってやるか」

○展示会場

立て看板が立っている建物入口。3人が歩いてくる。

○展示会場内

3人は壁に掛けられた絵とか、工芸品を見て回る。

立野はあるカラフルでポップな絵の前で立ち止まる。

立野「これ良くない？」

安藤「いかにも、ぜんえいって感じ」

立野「花子ちゃんの作品？」

花子「隣のがそう」

その隣には工芸品が壁に掛けられている。緑色の1と0が正方形の中に表示されており、ランダムに1と0が切り替わっている。1の表示より、0と表示されるマスがはるかに多い。

立野「かけえ。マトリックスって感じ」

安藤「いいじゃん、モダンで」

花子「ありがとう」

安藤「何かのメッセージ？」

花子「現代社会の象徴なの。この1と0は人間の象徴で、1が勝ち、0が負け。中間はないということ」

安藤「なるほど」

立野「色をもっと増やせばよかったじゃん」

花子「シンプルなほうがよくない？」

立野「そうかな」

しばらく花子の工芸品を眺める3人。

1から0に切り替わるマスもあればずっと0のままのマスもある。

立野「ずいぶん変動が激しいんだね」

花子「今の時代、変化が激しいの」

花子は自分の顔を入れて工芸品を自撮りする。

立野「ん？」

花子「インスタに上げるの」

立野と安藤は花子のインスタを覗き込む。すでにいいねが何個もついていてコメントも。「あいかわらずきれいだね」

とか「さすが芸術家」とか「どこでや
てるの。花子と会いたい」など。

立野「ずいぶん人気だね」

花子はうなづく。

立野「飯行く？」

安藤「腹減ったな」

立野「ラーメン屋でいいかな。花ちゃんは」

花子「いいよ、ラーメンで」

立野「駅前にうまい店あるんだ」

○街の通り

並んで歩く3人。道端の木に桜が咲いて
いる。

立野「花子ちゃんがああいうの作ってるとは
意外だったわ。もっとポップなものを想像
してた」

安藤「俺も。かわいい系のかと」

花子「もう春だね」

立野「そういえば、桜が咲いてるの初めて気
づいた」

花子「とつくに咲いてるよ」

安藤「俺ら夜行性だから。昼間は寝てるから」

花子「ラップを始めたきっかけ、聞いていない？」

立野「竜神のDJが高校の先輩でさ」

花子「竜神？」

安藤「知らないの。ヒップホップグループ。テレビにも出てるし」

立野「DJ わたべ。たまに地元にも帰ってくる。ラップバトルも見に来るかも」

○（回想）高校外観

川本工業高校と校門に表示されている。

○同・校舎

壁に落書きがいっぱいされており、床にはごみが散乱している。

○同・校内

派手な格好のDJわたべがボディコン

の女の子を連れて歩いている。いかついボディーガードが付き従い、その周りに生徒たちが群がって騒いでいる。

その中に立野と安藤もいて飛びあがって、わたべの姿を一目見ようとしている。

○同・教室内

がらんとした教室。

黒板には「今日は自習です」と書かれている。「は」にバツ印が書かれ「も」と上に書かれている。

立野と安藤が興奮した様子で立っている。

立野「DJわたべ、見た？」

安藤「ああ、かつけえなあ」

立野「番長がスターになるとは」

安藤「喧嘩も強いし最高だね」

立野「うちらもラッパー目指さないか」

安藤「ラッパー。男の憧れ」

立野「お前、リズムメーカー持つてるって言

つてたろ」

安藤「うん。リズムは俺が作る」

立野「じゃあ俺が詩を書く。グループ名は？」

安藤「のりおとたかしから、組み合わせてのりたてはどうだろ？」

立野「漫才コンビみたいじゃん」

安藤「だめか」

立野「川本小僧ってどうかな」

安藤「川本小僧。そうだな、それでいいや」

立野「うちら川本小僧。よろしく」

安藤「今日はたぶん、運命の日だ」

立野「これからサイゼ行かない？ ゆっくり計画を練ろうよ」

○ラーメン屋・店内

カウンターに並んで座り無言でラーメンを食べる3人。

花子「立野君、さっきから何考えてるの」

立野「えっ？ 今もラップを続けてる理由」

花子「ふーん。どうして続けてるの」

立野「自分の内側にあるどろどろしたものを
外に形にして現したいっていう欲求か
な。それで自分自身も一回り大きくな
れそうだし」

安藤「かっこつけてんじゃねええ」

安藤がいきなり叫ぶ。

立野「いや、ただの承認欲求かも。みんなか
らいいね、って言われたい」

花子「わかる」

安藤「俺にも理由を聞いて」

立野「お前は女にもてたいとかそういう単純
な理由だろ」

安藤「大金をゲットしたいってのもある」

立野「まあ、今よりはいい暮らしができるの
は確かだろうけど」

安藤「いい暮らししたいねえ。貧乏から抜け
出したい」

立野「俺もそれはある。ところで花ちゃん
って地元はどこ？」

花子「都内だよ」

安藤「一人暮らし？」

花子「両親と一緒に」

立野「で、都内の美術大に行ってるの」

花子「そう」

安藤「お嬢さんじゃん」

花子「普通でしょ」

立野「いや、俺らと比べたらさ」

花子「ラッパ―って反社の人とか多くな

い？」

立野「知り合いに何人か」

安藤「ワルってイメージ？」

花子「うん」

立野「ほとんど最底辺の人間ばかりだからさ。

ラップで押し上がるって奴が、犯罪で

捕まる覚悟で、いちかばちか大金をせし

めようって考えてもおかしくないだろ」

花子「闇が深い世界なんだね」

立野「花ちゃんのいる所とはかなり違うだろ

うね。こいつなんて」

花子「え？」

安藤「おい！」

立野「いや、なんでもない」

花子「ラップバトルって何時から？」

立野「7時に来てくれれば」

花子「わかった。友達と行く」

○街の裏通り（夜）

ネオンがあちこちで輝いている。

○スネイク入口（夜）

花子が女友達と入って行く。

女友達「なんかやばそうじゃない？」

花子「友達が出てるの」

花子は友達の手を引っ張る。

○同・ホール内

多くの若者達で込み合っている。

ステージを見る花子。

M C 「次は地元出身、ノライヌ バーサス
川本小僧」

右側から黒づくめの服装の、坊主頭の
のいかつい男達3人が出てくる。

左側からは立野と安藤。

司会者はコインを投げて手のひらの
上に載せる。

立野とノライヌのリーダー川中 龍

(28) が両脇に立つ。

M C 「表裏どっち」

川中「表」

立野「じゃあ、裏」

M C は手のひらをどける。

M C 「先攻は川本小僧、音楽スタート」

立野と安藤はラップを始める。

観客は普通に聞いていて、2人は笑顔を
浮かべる。

M C 「サンキュー」

司会者は2人に拍手する。

立野と安藤は頭を下げる。ハイタッチす
る立野と安藤。

M C 「みんなお待ち。次はノ・ラ・イ・ヌ

だあ」

川中「フリースタイル行くぜ」

音楽が始まる。

ノライヌの3人はラップを始める。

川中「よええ男はだせえからやめとけ。へな
ちよこどもにラップは合わねえ。とつとと
家に帰ってかあちゃんのおっぱいしゃぶ
ってろ。D T、D T、D Tは消えろ・・・」

観客は沸いている。

ノライヌのラップに合わせて体を揺らし、一緒にD T、D Tと叫んでいる。

立野はこぶしを握っている。

川中「おめえはニート、親は生保。おめえは
ニート、親は生保。おめえはニート、親
は生保：：：」

川中は立野を指さしながらなりたてる。

立野「ふざけやがって」

安藤「おい、挑発にのるな」

川中「おまえのとーちゃん、ごみ、くず、ご

み、くず・・」

かつとしてノライヌのメンバーの一人、
渋谷茂（22）に飛び掛かる立野。

ノライヌの3人と川本小僧の2人は殴
り合いの喧嘩になる。

裏からボディーガード達が出てきて彼
らを引き離す。

○居酒屋外観（夜）

○同・居酒屋内

立野が頭を押さえながら焼き鳥を焼い
ている。

カウンターに男性客が一人、座っている。

武田が腕組して突っ立っている。

立野「いてて」

立野は包帯が巻かれた腕を押さえる。

武田「大丈夫か？」

立野「なんとか」

武田「昨晩は散々だったようだな」

立野「出禁3か月くらいしました」

武田「そっか」

立野「武田さんも喧嘩とかありましたか」

武田「一度あつたよ。鼻を折られた。鉄パイプで」

× × ×

がらんとした店内。

カウンターの奥で立野が背中を向けて
ラップを口ずさんでいる。

コンビニの袋をいくつか抱えて武田が
来る。立野の後ろで聞いている武田。

武田「悪くはないと思う」

立野が振り返る。

立野「聞いてたんですか」

武田「ノリは好きだけだな。なんかかつこつ
けてる感じがする。自分をさらけだして
ないっていうか」

立野「……」

武田「ありのままの自分を出せば共感される
と思う。心の闇とか」

立野「心の闇ですか」

武田「そんな気がする」

立野「闇。難しいな」

武田「あいみょんみたいなの」

立野「今度聞いてみます」

男性客が一人入って来る。

武田「しのさん、おひさしぶり」

男性客「いつものやつちょうだい」

武田「はい」

立野は角ハイボールを作って出す。

武田「どうぞ」

男性客「あいみょんがどうかしたの」

武田「しのさん、知ってんだ」

立野「お客さん、武田さんの知り合い？」

武田「俺のバイト時代からの常連さん」

男性客「武田君もラッパ―目指して頑張って

たからね。彼のラップバトル見に行った

ことあるよ。メタルバットって名乗って

たっけ」

武田「恥ずかしいからその話はやめてくださ

い」

男性客「恥かしがるこたあないだろ」

武田「女房に出会うまではラップ一筋だったからな」

立野「武田先輩は俺の目標です」

武田「よしてくれ。目標にできるほどの人間じゃない」

立野「いえ、でもこの道の大先輩ですし」

男性客「立野君にビール一杯おごろう」

立野「あ、俺アルコールが全然ダメなんでノンアルで」

男性客「そうなの。意外だね」

立野「おやじがアル中で、酒は飲まないと決めてるんで」

男性客「意外と真面目だな」

武田が缶からグラスにノンアルビールを注ぎ、立野の前に置く。

立野は一気に飲む。

40代の店長が出てくる。

店長「立野君、ちよつといいかな」

立野「はい」

○バックヤード部屋内

店長が椅子に座っている。

店長「立野君もここに入って3年になるよね」

立野「はい」

店長「武田君みたいに正社員になる気はないかね」

立野「正社員ですか」

店長「立野君は真面目で仕事もできるし、給料も普通の会社の新入社員と同じくらいは出すよ」

立野「……」

店長「悪い話じゃないと思う。よく考えてみて」

立野「わかりました。ありがとうございます」

店長「来週中には返事を聞かせて」

○居酒屋・外（夜中）

立野が出てくる。

電柱の影に渋谷が立っているのに気が付く。立野は顔を隠して歩いていく。

○カラオケボックス内

立野と安藤がラップしている。2人で息を合わせている。

録音したラップを聞く二人。

立野「いいわ、これ」

安藤「いけそうだな」

○デリヘル事務所（夜中）

椅子に座って安藤がプロミスの督促状を見ている。来月中旬に100万一括で支払えと書いてある。

葛野が入って来る。

葛野「しけた顔してんな」

安藤「はい？」

葛野「女の子は何人いる？」

安藤「3人です」

葛野「みんな出か」

安藤「はい」

葛野「ところでさ、いい仕事見つけちゃったよ」

そう言って葛野は財布を取り出して中身を見せる。1万円の束。

安藤「すごっ。賭博？まさか強盗？」

葛野「いや。興味ある？」

安藤「いい仕事みつかったんですか」

葛野「ここ、電話してみ。仕事紹介してくれるよ」

葛野はスマホを見せる。安藤が真剣な目で見ている。

メモ帳を取り出して番号を書いている。

安藤「ありがとうございます。助かります」

葛野「よかったな。いい仕事みつかって」

安藤「葛野さんは？」

葛野「誰か人を紹介してくれて頼まれたんでな。安藤君は適任だと思って。俺は人材募集担当」

安藤「ほんと、ありがたいです」

葛野「じゃあ、がんばって」

葛野は安藤の肩を叩く。

○A T M

安藤が複数のカードを差し込み、金を引き出している。肩に下げた黒いバックに入れていく。後ろに何人か人が並んでいる。

警官が入って来る。安藤の肩を叩く。

警官「失礼ですが」

安藤「え？」

警官「ちよつと来てもらえますか？」

安藤「え？どこへ」

警官がもう一人入って来る。うろたえる安藤。

○居酒屋「川本次郎」内（夜）

立野が料理を作っている。

スーツ姿の若い男2人が入って来る。

立野「いらっしやい。あれ、見た顔だな」

鈴木「鈴木だよ。立野。まだ地元にいたんだ」

連れの男「知り合いですか？」

鈴木「高校の同級生」

立野「カウンターでいい？」

鈴木「うん」

鈴木と連れの男は並んで座る。

立野「仕事帰り？」

鈴木「営業で得意先を回っててね。その帰り。立野はまだ安藤と組んでんの」

立野「ああ」

鈴木「たいへんだね」

立野「いや、別にたいへんでも・・・飲み物は何します？」

連れの男「自分はビールで」

鈴木「じゃあ、俺も。立野にも一杯おごるよ」

立野「どうもノンアルもうわ。こちらの方は後輩？」

鈴木「4月に入ってきた新人」

立野「会社入って何年？」

鈴木「5年になるな」

連れの男「鈴木さんには色々と世話になって
ます」

立野「偉くなったもんだ」

鈴木「まだ係長さ」

立野「スーツも似合ってるよ。ビジネスマン
って感じ」

鈴木「おだてんなよ。照れるだろ」

立野「俺なんて、高校の頃から何も変わらな
いから。スーツ着たことないし」

鈴木「ずっとラップ続けてるのも偉いと思う
よ。渡部先輩の影響で始めた奴はいっぱ
いいるけどみんな辞めてるもんな」

立野「あきらめが悪いだけさ」

鈴木「だけど、スネイクのラップバトル出て
るんだろう。噂は聞いたぜ。優勝したら音
楽雑誌に載るって」

○川本警察署外観（夜）

○同・留置所

ガラス越しに立野と安藤が向き合っている。

安藤「俺、懲役くらいかも」

立野「えっ」

安藤「ごめんな」

立野「金に困ってるんなら言ってくれたらよかったのに」

安藤「100万だぜ。どうにもならない」

立野「川本小僧の未来がぶっ壊れたよ」

安藤「ほんとごめん。うかつだった」

立野「……」

安藤「立野一人で頑張って。俺はムリだ。才能がない」

立野「俺だってそんなのない」

安藤「いや、まだ行けるだろ。大丈夫だ。俺には構わずに続けてくれ」

立野「曲は誰が作るんだ」

安藤「あんなの誰にだって作れるよ。リズムマシンの使い方教えてやる」

○川本警察署玄関（夜）

花子が立っている。立野が出てくる。

花子「安藤君、どうだった」

立野「げっそりしてた。懲役くらいかもしれないって」

花子「そう」

立野「ラップ辞めようかな」

花子「え？」

立野「きれいさっぱりあきらめて就職しようかな」

花子「……」

立野「花ちゃんはどう思う？」

花子「中途半端に辞めちゃうと、後で後悔しない？まだいけそうな気がする」

立野「……」

歩道脇の桜並木。花は散っている。

2人は薄汚い軽自動車の脇に来る。

立野「まだ時間ある？」

花子「30分くらいなら」

立野「いいところがあるんだ。花子ちゃんにも見せようと思つて」

× × ×

車で夜の街を走る立野。窓を全開にしている。

花子「風が気持ちいいね」

立野はうなづく。

○海辺の駐車場（夜）

車が止まっており、立野と花子が堤防によりかかって海を見ている。

浜辺にはバーベキューをやる若者のグループが何組かいる。

花子「こんなところ初めて来た」

立野「コーヒーでも飲む？」

花子「うん」

立野は近くの自動販売機でコーヒーを2本買い、1本を花子に渡す。

花子「ありがと」

立野「安藤が無事に出てきたら、ここで花火

でもやろうよ」

花子「……じつはね」

立野「ん？」

花子「来月からフランスに留学に行くことになつて」

立野「留学？いつまで？」

花子「2年の予定」

立野「2年も」

花子「あと、彼氏ができた」

立野「え」

花子「彼氏」

立野「……そっか。友達として、うまくいくよう応援する」

花子「ラップ頑張つて。うまく言えないけどいけそうな空気があると思う」

立野「空気？」

花子「うん」

立野「安藤にも言われた」

花子「まだまだいけるって」

立野「次回で最後にしようと思つてんだ。

いいかげん、まともに働かないと」

○川本次郎・外観（夜）

○同・中

立野と武田が料理を作っている。

武田「来週の週末はどうする？」

立野「相方がいないんですが」

武田「一人でもいけるだろ」

立野「俺、今回で最後にします。正社員の誘いもあるし」

武田「わかった。名前は どうする？」

○立野の家・居間（夜）

太郎が新聞を読んでいる。

立野が料理を作っている。

立野「俺、就職することにしたよ」

太郎「ラップは？」

立野「次のラップバトルで最後にする。おやじにも見に来てほしいな」

太郎「駅前だろ。冥途のみやげに行ってみるか」

○立野の部屋

リズムマシーンが置いてある。マニュアルを読みつつ、立野は首を傾げている。スマホを取る。

花子の声「もしもし」

立野「花子ちゃんって機械に強い？」

花子の声「なんの話？」

立野「俺、メカ音痴でさ。手伝ってもらいたいことがある」

× × ×

花子がリズムマシーンをいじっている。

花子「使い方わかった」

立野「よかった。助かるよ」

花子「どういうパターンにする？」

立野「そうだな。彼氏ってどんな奴なの」

花子「同じクラスの人。告白されたの」

立野「ふうん」

花子「どうかした？」

立野「いや、なんでもない」

○成田空港外観

○同・出発ロビー

立野と花子が立っている。花子の両親や友達もいる。

立野「俺、海外に行ったことないけど、金貯めてフランスに遊びに行くよ」

花子「うん。ぜひ」

立野「コートダデルだっけ」

花子「(フランス語っぽく) コートダジュール」

立野「そこで泳ごうよ」

花子「案内する」

立野「じゃあ」

花子「じゃあね。ラップ頑張って」

花子は恋人らしき男と話し抱き合っている。立野はその様子を見ている。

花子は一堂に手を振る。見送りの人々も手を振っている。

○同・建物屋上

真っ青な空に飛び立つ飛行機。立野が空を見上げている。

○カラオケボックス（夜中）

ラップの練習をする立野。

電話が鳴る。

電話の声「時間ですが」

立野「延長します」

○川本次郎・店内（夜）

カウンターにスーツ姿の二宮一平（3

3）が一人座っている。

武田が料理を作っている。

壁には、スネイクのラップバトル開催のポスターが貼ってある。

二宮の電話が鳴る。

二宮「え？まだ曲できてないの。困るなあ」

武田が聞き耳を立てる。

二宮「今月中には頼むよ」

電話が切れる。

武田「二宮さん？」

二宮「なに」

武田「お仕事は何されてます？」

二宮「音楽事務所」

武田「プロデューサー？」

二宮「そうだよ」

武田「あつ、あの、すぐ近くでラップのイベントやってるんで見に行きませんか」

二宮「誰が出てるの？」

武田「ノライヌとか。あところで働いてる

立野君も。見たことあると思うけど」

二宮「ノライヌは聞いたことある。そうだな。ひまだし行ってみるか」

武田「ぜひぜひ。案内しますよ」

武田が厨房から出てくる。

○スネイク・ステージ脇（夜）

立野が立っている。ノライヌの川中が隣に立っている。

川中「懲りねえな。相棒は？」

立野「捕まった」

川中「ふーん。痴漢でもしたか」

立野「そんな奴じゃねえよ」

川中「ま、お手並み拝見といくか」

× × ×

司会「次はおなじみ、川本小僧。音楽スター
ト」

音楽開始と同時にステージに飛び出し
ていく立野。

観客1「あれ、一人じゃん？」

観客2「相棒は？」

立野「一人になっても川本小僧は川本小僧
だ！」

○スネイク・内

立野がラップを熱唱しつつ、腕を前に突

き出して上下に振っている。

入り口ドアの近くに太郎がいて、頭上で杖を振っている。

隣の若い男が怪訝そうに見る。

若い男「あぶねーぞ、おっさん」

太郎は彼に話しかける。

太郎「あいつ、俺の息子」

若い男「川本小僧の？」

太郎「ああ」

若い男「へえ。おっさんが」

近くに立っているギャルっぽい若い女

2人組も太郎を見る。

若い女「立野君のお父さん？」

太郎「ねえちゃん達、この後、飲みに行かない？」

若い女「ええっ」

もう一人は笑っている。

ステージ上に立野。

立野「最後の曲です。みんな今までありがとう」

立野は歌いだす。

立野「俺の周りのみんなに感謝。先輩に

感謝。産んでくれたおふくろに感謝。

飲みすぎなきやいいとーちゃん。育ててくれたおやじに感謝。俺の相棒、たかしに感謝。俺らのラップ、聞いてくれたみんなに感謝。ありがとう、おれの人生。つきあってくれた仲間、支えてくれたみんなに感謝……」

腕の動きに合わせて首を振っている観客達。

二宮も首を振りつつ、周りの観客の様子を見たりしている。

観客1「おっさん、音楽関係者？」

二宮「そうだよ」

観客1「そうなんだ。ここの客、20代ばかりだからさ」

二宮「彼、有名なの？」

観客1「立野君」

二宮「いいね、彼」

○ホール外

立野が歩いてくる。

二宮がタバコをふかしながら立っている。

二宮「こんばんは。立野君だね」

立野「そうですけど何か」

二宮「ちよつと話がある。川本次郎でゆつくり話そう。腹減ってるだろ。俺、こういう者」

二宮は名刺を見せる。

名刺には「二宮音楽事務所」と書いてある。

立野「えっ？音楽事務所」

二宮「こういう話は初めてかな」

立野「はあ。えっ、ほんとですか。いや、嬉しいです。夢みたい」

100枚

